
焰 -ホムラ-

篠原冬美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焰 - ホムラ -

【Nコード】

N2844E

【作者名】

篠原冬美

【あらすじ】

20**年、平和は崩壊した。大陸で台頭していた新華共和国連邦が日本国に宣戦布告した。半世紀の月日を経て再び日本は新たな国難に直面したのだ。日本人は約束されていたはずの平和や尊厳が砂上の楼閣であったことに気がつく。新たな国難に直面した時、その時を生きた人々の物語。

序章

20**年7月

「日本国」は新たな国難に直面した。

大陸で圧倒的な資源と経済力で世界の先進国に台頭し、国土の拡大を進めてきた大国

「新華共和国連邦」が日本に宣戦布告。

新華軍は北海道稚内と沖縄諸島から南北同時上陸を開始した。

第1話 早朝

20**年7月7日 札幌

朝の5時、不破^{フウユウ}悠は電話の音で目を覚ました。

携帯電話はLEDを輝かせつつ、メロディを響かせた。

「うう…誰だ…」

ベッドの布団をもそもぞさせながら悠は携帯に手を伸ばした。

「うるさいなあ…もう。」

悠の隣には女が寝ていた。不破^{フウハルカ}遥。悠の妻だった。

悠は23歳。遥も同じ23歳。二人は結婚して一年も経たない平凡などどこにでもいる夫婦だった。

「マナーにしときなさいよ!。」

遥は枕に顔をうずめながらぼやく。

「うん。」

悠は鳴り響く携帯を切る。そして再び眠りにつこうとした。

しかし、携帯は再び振動した。

二度目の着信に、悠は目をこすりながら出た。

「はい…。」

「陸上自衛隊北部方面隊第11旅団真駒内駐屯地の佐々木です。不破二等陸曹、非常呼集です。大至急駐屯地に集合して下さい。」

電話の向こうからは焦りに満ちた声が聞こえてきた。

「…はあ。」

悠は寝ぼけ眼で返事を返した。

電話はブツリと切れた。

「なに…？」

遙も目をこすりながら体を起こした。

「…ん、呼び出しくらった。急いで駐屯地行かないと。」

悠はくあつとあくびをしベッドから起き上がった。

「今日は休みなんじゃなかったのー！？」

遙はベッドの上から不満そうにぼやいた。

悠は自衛官だった。札幌郊外の真駒内駐屯地に勤務する二等陸曹。

なんと表現すべきか。これまた普通の自衛官としか言いようはない。

悠はシャワーを浴びに浴室に入っていく。

遙は、布団を剥ぎ取ると自分の体を包むものは何もないということ
を思い出し、とりあえず服を着た。

外は日が登り始めていた。

「5時かあ。朝ご飯作ろうかな…。」

遙は悠が出かける前に彼に軽く朝食をとらせるべく準備を始めた。

「急ぎだし…パンとスクランブルエッグでいいよね…。」

遙は冷蔵庫から卵を取り出し、フライパンを熱した。卵を解き、手
早くフライパンに流し込んでかき混ぜてゆく。

遥は心の中で文句を言っていた。

もう、せっかく悠が休みだから遅くまで寝たあと、買い物にでも付き合っただけおとなしく思ってたのに……
いつもより早く起きちゃったじゃん。

そんな文句が次々頭に浮かび、遥の唇は自然に尖った。

そんな事を考えてつつも遥は卵を半熟に仕上げ、火を消しレタスとトマトを添えた皿に盛り付けた。

「あ、今日の天気……。ニュースやってるかな？」

遥はおもむろにリモコンのスイッチを押してテレビをつけた。

『……えー、まもなく総理官邸から中継が始まります。』

テレビから流れてきた映像は早朝に流れるべきものではない特殊なものであった。

画面の上には『緊急有事速報』の文字が流れ、身なりの整わないニュースキャスターが深刻な顔でしゃべっていた。

「何これ。地震？」

遥は思わず朝食の準備を忘れてテレビに見入った。

ただし、地震の速報なんてものはこの国において稀ではない。

彼女には特に興味以外の感情はなかった。

『総理官邸から中継です。』 諏訪義彦 “内閣官房長官です。』

画面には白髪で眼鏡をかけた痩せ型の男が姿を表した。

スーツの上着はなく、袖をまくったワイシャツ姿、表情は暗かった。

そこに悠がシャワーを終えて姿を表した。

腰にタオルを巻き、無言で遙の後ろに立ち同じくテレビに目をやった。

『本日未明、新華海軍艦船数十及び新華空軍機数十が我が国の領海及び領空を侵犯しました。この件に関して、新華政府より日本政府に対して国交断絶及び宣戦の旨が通達されました。政府は直ちに新華政府に抗議すると共に…』

悠は顔色を変えた。

事の重大さを認識するまでに意外と時間はかからなかった。

「マジかよ…！」

悠は走り出した。

「え？何？どういうこと！？」

遙はまだ事態が飲み込めず悠を追いかけて寝室に向かう。

悠は寝室のクローゼットから物色するように自衛官の緑色の制服を引っ張り出しながら叫んだ。

「紛争だ紛争！日本と新華の間で戦闘が始まったんだよ！だからさつき駐屯地から非常呼集かったんだ！」

「え！？え！？」

遙は信じられないといったような顔だ。ただただとりあえず深刻な何かが起こっていると認識するのに精一杯だった。

「遙、わりい。テレビ見てて！」

悠はスラックスをはきながら遙に言う。

遙は頷いて再びリビングに駆けていった。

悠は微かにある思いを抱いた。

まさか戦争なんて自分の身近に起こるわけがない。
誤報だよな？何かの間違いに違いない。

と。

その時々的情勢に応じて自衛隊では非常呼集や待機の指令がでるが、
今まで大それた事態に至らずにきた。

だから急ぎつつもそんな淡い思いを抱かずにはいらなかった。

でも心の底では何か尋常じゃないものを感じていることに悠自身気づいてはいなかった。

着替えを終え、悠は再びリビングに向かった。

「何だつて？」

悠はテレビを見ている遙に詳しい状況を尋ねた。

「新華軍が沖縄に上陸したって。もうすぐ北海道にもくるってしゃべってる。」

遙は静かに言った。

「そっか。じゃあ俺行くから。」

悠は玄関に向かう。

「待つて、ご飯は？」

遙は立ち上がって悠を呼び止めた。

「食ってる暇ねーから。」

遙も悠を追いかけて玄関に向かう。

悠は玄関に座り込み靴紐を結んでいた。

遥はその手が俄かに震えているのを見た。

「気をつけてね。何かわかったら電話してよ。」
遥はそれだけ言うのが精一杯だった。

「ああ。わかった。」

悠は靴紐を結び終えて立ち上がり、遥の方を見た。

「大丈夫だって。今日も晩飯頼むぜ。」

悠は遥の肩をポンと叩いてから頬にキスした。

遥の深刻な顔とは対照的に悠は笑顔だった。

「行ってくるわ。」

悠はそう言って走って出て行った。

二人はこれが暫くの別れになるとは思わなかった。

早朝 5：45 札幌

異様に澄み渡った空に鳥の囀りが響き渡り、対照的に街は物々しい賑やかさに包まれつつあった。

第2話 防衛出動発令

7月7日

日本と軍事的に強い結びつきをもつアメリカ。

その国防総省、通称”ペンタゴン”が、新華軍の動きを察知したのは午前2時頃であった。

すぐさま、国防総省は日本の防衛省へ情報を送った。

しかし司令中枢に情報が伝わったのは午前3時であった。

情報伝達の遅いと言われる防衛省であるが、この時ばかりはたまたま比較的早く情報が伝達された。

自衛隊はすぐさま厳戒態勢に入った。

しかし、一方で東シナ海と日本海北部には既に新華海軍が展開していた。

攻撃察知はあまりにも遅すぎた。

午前4時

自衛隊対して、

「攻撃予測事態」に伴う史上初の

「防衛出動」が発令されるが、これは後程、

「攻撃事態」に伴う

「防衛出動」へと変わることとなる。

それからわずかな時間で、新華海軍及び空軍は沖縄諸島に接近、主要施設へのミサイル攻撃並びに空爆が始まった。

宮古、与那国、石垣等の各島には新華陸軍が一個師団が上陸。

更に、沖縄本島にも新華軍航空戦力が展開。スクランブルを行った航空自衛隊機及び米空軍機との戦闘に突入した。

そして、日本海北部でも、火蓋は切って落とされようとしていた。

日本海北部には海上自衛隊護衛艦

「かぶしま」と

「まつしま」がいた。

二隻は最寄りの護衛艦隊に救援を頼みつつ、新華海軍の艦艇二十隻を相手に戦わねばならなかった。

頼りの綱は、海上自衛隊が世界最高水準を誇る艦艇の性能と裏打ちされた実力だけであった。

苦戦は必至だった。

第3話 覚悟

午前6時15分

悠は札幌郊外にある真駒内駐屯地に到着していた。

悠はいつも通り正面ゲートへと車を走らせるが、そこにはまたいつも通り数名の隊員が立っている。

悠は車のドアを開けて身分証明書を提示する。

その身分証明書を隊員が入念にチェックし、

「よし！」

と合図する。

やつのことで到着した駐屯地はやはり物々しい雰囲気で、兵員輸送装甲車が行ったり来たりしている。

また、何人もの隊員らが深刻な顔で敷地内を駆け回っていた。

悠は急いで駐車場に車を止め、集合場所へと走った。

「第二中隊は揃ったか!？」

「まだだ!むしろ連絡が取れん奴が何人も…。」

色々な情報が飛び交う。

そんな混沌とした状況の中で、悠は集合場所である駐屯地内の体育館へと走った。

体育館には既に沢山の隊員らが集まっていた。

制服を着た者。迷彩服を着た者。上が迷彩服に下がジャージといういわゆる”ジャー戦”と呼ばれるカッコをした者。

皆、わけもわからずといった様子だった。「不破！」

体育館に足を踏み入れた悠に駆け寄りながら声をかけてきたのは、悠と同じ中隊に所属する数人の隊員たちだった。

「巻！一体どうなってんだ！？」

悠は自分と同期の隊員のひとり、巻健太二等陸曹の顔を見て叫ぶ。

「ガチで新華と戦争っばいぞ！」
巻は言う。

「ガチ！千歳からF-4がめっちゃ飛んでってるみたいだぜ！？」
請け合ったのはこれまた悠と同期の中嶋光輝二等陸曹である。

「携帯のニュースで沖縄と北海道に侵攻って書いてますよ！」
更に後輩の赤西一等陸士も続けた。

「これはいよいよ俺たちも戦地へかり出される…ってヤツか！？」
中嶋は状況を確認するように言った。

「いや、とにかく今は落ち着いて説明を待とう。何かの間違いかも…」

悠は好き勝手口々に喋る彼らを制するように喋ったが、さらにそれを遮るかのように赤西が叫んだ。

「間違いな訳ないツスよ！」

赤西の顔は不安に満ちていた。

いや…、不安を隠せないのは皆一緒に、ただただここにいる隊員たちは状況を把握することで冷静になろうとしていた。

すると申し合わせたかのように、各部隊を束ねる士官らが体育館に入ってきた。

少し早めの歩調、厳しい顔つき。

これは自衛隊なら当たり前のことだが、額に滲んだ汗や、厳しいと表現するよりは緊張した面持ちと表現すべき顔はやはり何かの異常を物語っていた。

士官たちは体育館の中の空気を切り裂くように叫んだ。

「第一中隊集合！」

「第三中隊集合！」

体育館の中には第18普通科連隊に所属する各中隊が集まっていた。士官たちは各部隊に集合をかけたのだった。

ざわめきに溢れ、統制など存在しなかった体育館に規律が生まれ、一系乱れぬ動きで隊員たちは整列してゆく。

「なんだそのカッコはあ！！！」

悠がそそくさと自分が所属する第三中隊の列に加わろうとしてる最中、いわゆるジャー戦姿の隊員が尻に蹴りを食らっている姿も見受けられた。

もつとも、本来なら各隊員らのカッコがバラバラなんてことはめったにないので珍しい光景であったが、緊急事態ということもあり蹴りを入れた士官もその後は何も言わなかった。

ジャー戦姿の隊員らはほぼ駐屯地の中にある官舎住まいのようで、彼らは”叩き起こし”を食らったのだとすぐに想像ができた。

呆れた面持ちでその様子を冷たく眺めていた悠も、

「わき見すんな！」

と上官に頭をスパンと叩かれた。

その上官こそ悠が所属する第三中隊の中隊長、栗林和将三等陸佐であつた。クリバヤシカズマサ

栗林は全員を整列させると前に出てきて静かに口を開いた。

それと同時に申し合わせたようにやはり各隊でも士官らが口を開いていた。

「状況は非常に深刻であるので、手短に説明する！」
栗林が各隊員らの目を見て何かを投げかけるように喋る。

「本日未明、新華軍が我が国の領空領海内に侵攻すると共に、新華政府から日本政府に対して宣戦布告がなされた！」

皆、それは知っていた。誰も何も言わなかった。
栗林は隊員らに動揺がないことを確かめてから続ける。

「これに伴い、本日0400（マルヨンマルマル）に三自衛隊（陸海空）に対して防衛出動が発令された。新華軍は現在沖縄諸島に上陸。また、ここからほど近い稚内への上陸も予測されている。我々はこれに対処すべく出動することとなった。」

「質問は！」
別の士官から隊員に向けられて発せられた。

すると沢山の隊員らが口々に、
「もっと状況を詳しく教えて下さい！」
と言う。

そのざわめきにも似た質問の数々にやはり士官は、
「静かにしろ！」

と自ら質問を求めたにも関わらず叫ぶ。

一般人がみたら滑稽に違いないだろう。

栗林は口を開いた。

「状況は現場までの移動中に更に詳しく説明する。わかっているとは思うが、状況が状況のため、我々は早急に出発し国土防衛に当たらねばならない。残念だが暫くは帰ってこれない。」

「そんなバカな！」

隊員らは更に不平を喚きたて始めた。

「まだ集合してない奴もいますよ！」

「出発は何時ですか！？」

まさに混沌とした状況になりつつあった。

悠はそんな中思い出していた。

遙に言い残してきた言葉を。

約束を破ってしまったような罪悪感を噛み締めていた。

栗林が叫ぶ。

「静かに！現時刻は0640、出発予定時刻は0800だ！この1時間ちよつとで諸君等は速やかに準備をし、家族に連絡を取れ。間に合わなかった者は置いていく。通勤組で満足な準備が出来ない者は家族に荷物を送付してもらおうように！以上！」

栗林は最低限を告げ、また士官らと共に足早に去っていった。

取り残された隊員らはただただ呆然とした。

「ウソだろ！？俺は戦争するために自衛隊に入った訳じゃねーぞ！？」

「1時間って…女にも会えねーよ！」

隊員らは怒りを爆発させる。

怒りの矛先を向ける先もなく、あるものは怒鳴り散らし、ある者はオロオロし、ある者は足早に体育館を出て行く。

覚悟など出来ていない隊員らが圧倒的に多かった。

本音と建て前が矛盾して存在する自衛隊という組織における現状がまさに浮き彫りとなった形だ。

悠も例外ではなかった。

悠の場合、防衛出動を想定せず、伊達に自衛隊で訓練を積んできたわけではない。

ただ、

「まさか」、

「まさか本当に」。その一言であった。

悠は気を取り直してまず自分が何をすべきかを整理した。

悠は携帯電話を手に取り、体育館を出た。

体育館の外には電話する隊員らが沢山いた。

悠は急いで電話をかけた。

コール音の後に聞こえてきた言葉は、やはり遙の声だった。

『悠！？』

「遙？あのさ…やっぱり今日は帰れない。」

暫くの間後に

『うん、だいたい予想してた。っていうか暫く帰ってこれないんでしょ？』

という落ち着いた声が聞こえてきた。

「うん。ホントゴメン。やっぱり…稚内に行くみたいだからさ。」
『いいよ…。確実に帰って来てくれさえすれば。』

遙がしみじみと言う。

「…。」

しかし悠からは何も言えなかった。

帰って来れる保証なんて無いのだから。

逆にそれを悠より遙の方が先に想定していた。

その事に悠自身呆れるほどに感心してしまった。

「帰って来ないと許さないよ。」

遙が続ける。

「うん。約束する。」

悠は自信もなくこう言うしかなかった。

「でさ…」

悠は気を取り直して遙に必要な荷物を送るように頼んだ。

「待つて、メモとるから。」

遙は適切に対処していく。

悠は必要物品を読み上げながら、自らの日常を省みて、このかけがえのない存在の大切さを噛み締める。

「わかった。急いで送るから。」

遙がそう言った直後に悠はそつと口を開いた。

「なあ…遙…。」

「ん…え？何？」

「ありがとう。」

悠の口からは普段絶対出ないような言葉がこぼれ落ちた。

「え？う…うん。」

遙は不思議そうに返事した。

「んじゃ、行ってくるから。」

悠は寂しそうに言った。

「うん。気をつけてね！死ぬなよ！。」

遙は励まそうとしてくれるのか明るい声を返してくれた。

「遙、お前の事ずっと好きだから。向こうに行っても連絡する。ぜ
ってー帰ってくるから！」

悠は涙をこらえて電話に叫ぶ。

「…。」

電話の向こうから声はない。

「…んじゃ、遠野のお義父さんとお義母さんにもよろしくな。」

「うん…。」
泣いていた。

悠はそのまま携帯の電源を切る。

周囲には未だに必死に電話で話をする隊員らで溢れている。

「0709か…。」

悠は携帯の時計を見る。

「よし、着替えて…荷物準備して行くか。」

悠は普段迷彩服などの荷物を保管しているロッカー室へと走る。

午前7時10分

札幌出発まで50分に迫った。

第4話 運命

午前7時50分

いよいよ、出発の時間が迫っていた。

悠は戦闘服に身を包み、最低限に荷物を背負い武装してトラックに乗り込む隊員の列の中にいた。

続々と隊員らを載せた兵員輸送車やヘリが駐屯地を発ってゆく。

澄みきつた空は三沢基地から飛んできたと思われるF-2（エフ二）支援戦闘機が轟音を轟かせて北の方角へと飛んでゆく。

悠はそれを見上げて自らの行く末に一抹の不安を感じた。

「不破！」

ふと悠の後ろに並んでいた巻が声をかけてきた。

「なんだ！」

トラックの走行音にかき消されないように悠は返事を返す。

「お前、遙ちゃんにはちゃんと電話したのか！？」

「したよ！余計なお世話だバーカ。」

「新婚さんは辛いんじゃないかって心配してやってんだよアホ！」

よくもまあこんな時に人の心配ができるものだと思悠は呆れた。そこが巻のいい所ではあるのだが。

巻はよく悠の家に遊びにきてはよく遙が作った飯を食らって、悠と遙にいじりを入れて帰ってゆく。

悠にとって少し煙たい存在ではあったが、逆にそれだけ親密な仲でもあった。

一言で言うところ腐れ縁と表現出来る。

しかし、彼なりに不安を紛らわすために、どうでもいい話題で他人と会話するという手段に出ていた。

皆、不安だった。

いよいよ悠たちはトラックに乗り込む。

狭苦しいトラックの荷台の側面に一列に並んで座らせられる。長い道中、せめて椅子も山手線の椅子くらい座り心地が良ければいいのに、座り心地は勿論悪い。

しかも悠の隣にはあの栗林三佐が座っていた。

悠は気まずそうにするが相手は至って気にする様子もない。

悠はまたとにかく長い道中の不安をも案じなければならなかった。

「全員乗ったか!？」

トラックの下で隊員が叫ぶ。

「よし!出せ!」

トラックは掛け声と共にゆっくり走りだした。

トラックは晴天のもと駐屯地のゲートから公道へと乗り出す。

するとそこには隊員らが驚く光景があつた。

沿道に沢山の一般人がいた。

ある者は叫び、ある者は小さな日の丸を振っている。
赤ん坊を抱える女性もいた。

「頑張れー！」

「気をつけてー！」

「日本を頼むぞー！」

「お父ちゃん！」

歓声が響く。

トラックに乗り込んだ隊員らは目を丸くして互いの顔を見合わせたり、苦笑いをしたりした。

ふと刹那に聞き慣れた声が悠の耳に飛び込んできた。

歓声の中でそれは微かに悠の耳に届いた。

「ゆうー！」

悠はハッとしてトラックの二台から身を乗り出した。

「遙！？！」

悠は沿道の観衆の中に必死に姿を探した。

トラックはゆっくりとしかし容赦なく走る。

「悠ー！！！」

確かにいた。

悠は遥を見つけた。

観衆の中必死に叫ぶ姿。

遥は悠に気付いていない。

「遥あー！！！」

悠はありったけの力をこめて叫んだ。

すると遥は気がついた。

トラックは遥の10m手前まで迫った。

「悠！」

遥が必死に悠に手を伸ばした。

遥に悠は叫んだ。

「遥！絶対帰るから！待ってる！」

悠は遥に手を伸ばす。

トラックが遥の手前を通り過ぎた。

しかし、お互いの手が触れ合うことはなかった。

「悠ーっ！！絶対帰って来なさいよー！！！」

叫ぶ遥の姿が小さくなる。

遥は笑いながら手を振っていた。

やがて沿道の観衆の中に遥の姿は消える。

悠は再び呆然と座席に座る。

そんな悠に似た姿の隊員らが数多く見られた。

トラックから身を乗り出し口々に子供の名を叫び手を振る隊員。
恋人に笑顔で手を振る隊員。

まるで運命に引き裂かれるように、家族に見送られた隊員もそうではない隊員も札幌の地を発っていった。

栗林がボソツと悠に言った。

「熱いねえ。」

と。

巻や数名の隊員がニヤついている。

「す…すいません。」

悠は赤面して俯いた。

栗林が尚続けた。

「約束どおり、とつと仕事片付けて帰るべさ。みんなだな。」

栗林はポンと悠の肩を叩く。

「はい。」

悠は唇を引き締めて頷いた。

兵員輸送車の長い列は一路、北海道日本海沿道へ向けて走り出した。

長い長い道のり。

隊員らの不安は少しだけ和らいでいた。

再び支援戦闘機が三機、トラックの群れの上を巡航してゆく。

もはや日本で戦争が始まったことは紛れもない事実で、誰もかれも
淡い期待は捨て、現実を受け止め始めていた。

「今日も暑いッスね。」

上がり始めた気温に巻の隣に座る赤西は呟いた。

第5話 地獄

7月7日 午後13時

札幌真駒内駐屯地をベースとする第11師団や東千歳の第7師団は北海道北部に続々と集結し、本州の部隊も続々と北上、南下しつつあった。

悠の所属する第18普通科連帯は日本海沿岸の小さな街”苫前”に配置された。

悠達を乗せたトラックは海沿いの国道を走る。

天気もよく潮風が太陽の照りつけを和らげてくれる。
涼しさに隊員らは少しだけ機嫌がよくなっていた。

そんな時だった。対向車線にも突然自衛隊のトラックの列が現れた。

「え？」

巻がトラックの外に目をやる。

悠も、他の隊員らも対向車線のトラックに目を向けた。

トラックに乗っていたのは一般人、子供から女性、年寄りなど普通の市民達であった。

「そうか…。避難するのか…。」

悠は呟いた。

市民たちの目も悠達自衛隊員らに向けられていた。

その目は、自失呆然とし、恨めしさをたたえ、誰ひとり笑っていない。

「仕方ねえよ。政府だって国民を死なせるわけにはいかねえんだ。むしろ泣きてえのは俺たちだよ。」

巻が言う。

「沖縄ではもう何人も死んでるらしい。彼らに比べたらどんなに幸せか……。」

栗林がまたボソリと言う。

「アイツらどこに行くんだろうな……。」

巻が次々にすれ違うトラックを目で追いながら呟いた。

やがて対向車線の自衛隊のトラックの列も途切れ、それからほどなくして悠達は苦前の牧草地へと降ろされた。

牧草地には風力発電のための巨大な風車が無数に並んでいて、近くにはパーキングエリアが整備されている。

そのパーキングエリアには自衛隊の車両がズラリと並ぶ。

「腰いてー。」

悠は両手を上げて体を伸ばす。

「いやあ……すげえな風車。」

牧場に立ち並ぶ風車を見上げて悠は感心する。

が、巻はと言うと

「うつわー田舎だなー。なんもねー。こんなトコ敵が攻めて来るのかよ…。」

と愚痴る始末だ。

「文句言ったって何も変わんねーぞ。」

悠は呆れた目を巻に向ける。

「だってよお… おお！？おい見ろよ馬だ！風車の下、馬歩いてるぜ！？」

悠は溜め息ついた。

直後、

「第三中隊集合！」

栗林が叫ぶ。

各部隊に集合がかかり、隊員らは即座に列をなす。

逐一集合がかかるのは自衛隊の性というか、定めであろう。

「これよりキャンプを設営する。各自役割を担い早急に敵の攻撃に備えろ。」

指示が飛ぶ。

解散がかかると、隊員たちは溜め息をつきつつ作業に取りかかるのだ。

テントを組み立てたり、トラックから物資を搬出したりする。

悠はトラックから物資を搬出していた。

食料の入った無数のコンテナを両手で抱えあげる。

夏の日差しに、額には汗が滲んだ。

「くそっ…あちい。」

悠は額の汗を拭う。

「キツイッスね。」

赤西が溜め息をつく。

悠は思わず手を休め、その場に立ち尽くし息をついた。

そんな時だった。

「よっ！」

女の声と共に、悠の尻に激痛が走る。

「痛って！」

悠は激痛に声をあげる。思わず片手で尻を抑える。

悠の尻に蹴りが入れられたのだ。

蹴りを入れたのは、悠とは別の中隊、スズハラユカに所属する涼原結花二等陸曹であつた。

「久しぶりい！」

涼原は悠にニカッと白い歯を見せて笑う。

しかし悠は苦悶の表情を浮かべ

「久しぶりじゃねえ！何すんだよアホ！」

と叫ぶ。

「お疲れみたいだったから気合いいれてやったのよ。感謝しなさいよ。」

涼原は不敵に笑う。

「余計なお世話だよ！オメエも女なら少しなあ…。」
悠は呆れる。

「…。」

赤西は呆然と2人のやりとりを見つめている。

「それこそ余計なお世話！」
涼原が言い返す。

「ハイハイ、さっさとあっち行け。俺は忙しいんだよ。」
悠は手で払う。

「あつそ！せーぜー頑張れよバア力。」

そう言つて涼原は去つていった。
悠は溜め息をつく。

「…何すかあれ。」

赤西が呟く。

「ほつとけえ。コイツらの夫婦漫才は今に始まったことじゃねえから。」

巻が口を挟んできた。巻の口元はニヤついていた。

「巻、下らねえこと言つてねーで仕事すつぞ仕事！」

悠声のトーンが少し上がった。

「不破さん、誰なんすかアレ！WAC（女性陸自官）にしては結構カワイイじゃないッスか！」

対して赤西の声のトーンが上がり、目が輝く。

「え…お前ああいうのがいいの？」

悠は少々引き気味である。

「いや、そうじゃなくて、不破さん仲いいんですね。」
赤西もニヤついていた。

「お前なあ…喧嘩売ってんのか？」

悠は再びコンテナを持ち上げた。

「いいじゃないッスか！あの人ッ！」

赤西も再び作業を始める。

「俺はお前と違ってもう結婚してるんですう。そこんとこヨロシク
ー！」

悠は軽く流してコンテナを運び始めた。

「オメエも働け！」

巻が赤西の頭をパシッと叩いた。

巻は呟いた。

「マジ平和…。」

日本海の波は静かで、戦争の影も形もない。

街からは人が消え、ただただ波の音や木々の揺れる音しか聞こえない。

まるで自分たちが異質な存在のように感じ、誰もかれもが浮かれていた。

隊員たちは、テントを張り、防弾の土嚢を積み上げ、戦車や高射砲を配備し、キャンプを設営し終えた。

その頃には日が傾きかけ、日本海に日が沈んでゆく。
空は異常な程に赤く染まり、東の空は群青に染まってゆく。

海も橙色に染まり、設営を終えた隊員らは座りこんでそれを眺めていた。

「なんで…俺らこんなトコにいるんだろうな。」
中嶋が呟く。

「…まあ、言いたいことはわかるよ。でも敵がくるかもしれないだから仕方ねえよ。」
悠は答える。

「いや…イマイチさあやつぱり信じらんねえんだよな。朝はあんだけ飛んでた戦闘機も飛んでこねーしさ。」
中嶋が言う。

「なんかそれ不気味ですよ。飛んでった戦闘機が帰って来ないなんて。」
赤西が言う。

「だから海自に沈められちまったんじゃねえの？」
巻は相変わらず欠伸をしながら言う。

「情報がねーな。それが少し怖えーわ。」
悠はしんみりと言った。

「さっき栗林三佐とかが夜の上陸や隠密上陸に備える…的な話してましたよ。第一中隊は折候に行ったらしいし。」
赤西が言う。

「一応、状況（自衛隊用語で想定したシナリオや作戦、行動を指す）は継続してるわけね。」
中嶋は溜め息混じりに呟く。

「となると俺たちは夜中にそこら歩き回らなきゃいけないのか。」
巻はうんざりした顔をする。

「夜か…。怖えーな。」
悠は唾を飲む。

「大丈夫だよ。敵は海自にやられて上陸できねーよ。」
と巻。

「とりあえず虫除けツスね。」
赤西が笑った。

その時だった。

海の方こう、地平線がキラキラと光り出したのだった。

「…あれ、なんだ？」

地平線を見ていた誰もが思った。

しかし、その正体を突き止めるまでに時間はかからなかった。

「対空戦闘用——意！！！」

「マジかよ…。」

地平線の上に光ったのは、それは紛れもない無数のミサイルだった。

その姿はみるみる光から目視できる実体へと変化する。

「やべえよ！走れ！」

悠たちは立ち上がり一目散に土嚢を積んだ壕へと走る。

その悠たちの直上をまた無数の地対空ミサイルが飛翔し海の向こうへ飛んでいった。

無数の敵ミサイルのうち、半数近くが空の上で味方ミサイルに迎撃されたがやはり残りはこちらに飛んできた。

「くそっ…トマホーク（巡航ミサイル）なんて田舎町に打ち込むもんじゃねーだろ！」

巻が叫んだ。

残った無数のミサイルは見事に悠たちの方に飛んでくる。

そして…

あっという間に着弾した。

あちこちで爆発が起こる。

隊員らはただただ身を屈めて爆風から身を守っていた。

対空ミサイルは次々に敵ミサイルが着弾し破壊されてゆく。

凄まじい轟音。

微かに聞こえる悲鳴。

テントや物資が吹き飛ぶ。

不意打ちを食らった部隊に統率はなく、ただただミサイルの脅威から隊員は身を守ることしか出来なかった。

「やべー！演習なんてへでもねー！」

と巻は悠の隣りでエキサイトしている。

とても悠にはそんな余裕はなく、体は震えていた。

ミサイル攻撃は殆ど一瞬の出来事だった。

ミサイルが全て着弾し終えると、辛うじて難を逃れた隊員らが頭を上げる。

周囲は、煙と無数の鉄片や残骸、血肉が散らばっていた。

悠は恐る恐る頭を上げ、その状況を見るや絶句した。
赤西なんかは、あろうことか嘔吐している。

「助かった…。」

悠の隣で呆然と巻が呟いた。

が、しかし全ては始まりだった。

誰かが叫んだ。

「海を見る…！」

その言葉に悠たちは視線を洋上に向けた。

地平線には、無数の黒い影。

敵の揚陸艦の大群が姿を見せていた。

「…ありえねえ。」

悠は呟いた。

午後5時43分

新華軍は稚内、天塩、遠別、初山別、羽幌、苫前の沿岸各地に迫った。

第6話 無力（前書き）

夕日を背に纏い、迫り来る洋上の敵の上陸部隊。

その影は地平線を埋め尽くす。

その姿は急襲をくらった自衛隊の隊員らに絶望感すら与えた。

そして、敵の上陸部隊を護衛する戦闘艦群が間髪入れずに次々に砲撃をしてくる。

凄まじい砲撃音。

地平線上で光る発砲炎。

その後、空からはヒュルルルと甲高い音が響き渡ると同時に多数の砲弾が降り注いでくるのだ。

「頭を下げる！爆風で首持ってかれるぞ！」呆然と海を見つめていた悠の頭を中嶋が抑えつける。

砲弾は悠たちの手前、目と鼻の先に着弾する。

ドオンと凄まじい音がし、土が舞い上がり、またどこからか悲鳴が聞こえる。

とにかく周囲は爆発の嵐。

自分たちが生き残っていられることが奇跡のように思えた。雨あられのように降り注ぐ砲弾に味方は次々に倒れてゆく。悠たちは何も出来ない。

ただただ爆風を避けるのみ。

そして敵の上陸部隊はどんどん迫る。

味方は対抗して必死に対艦ミサイルを打ち込むが、最初のミサイル攻撃で大半の火力を失った自衛隊の反撃は効果が薄い。

敵の揚陸艦が火を噴く様子が見えるが微々たる戦果に過ぎない。

敵の砲弾が降りしきる中、

「退却！退却！」

と誰かの叫ぶ声が聞こえる。

それを聞きつけた巻は叫んだ。

「おい、撤退だ！逃げるぞ！」

鉄帽を手で押さえ、頬を土につけながら巻は叫んだ。

「ダメだ！今動いたら危ない！」

中嶋がいさめる。

すでに泥だらけの顔は殺気に満ちている。

「だけど、ここで縮こまってたって、走って逃げたって砲撃に晒されるのは同じ……！」

巻が喋りかけてるときに再び近くで爆発する。

「敵の上陸が間近になれば必ず砲撃は止む。その時が撤退のチャンスだ。」

悠は周囲の隊員らに訴える。

「いやだ！俺は行く！」

隊員らは言う。

「やめとけ！死にたいのか！」赤西が怒鳴り散らす。

「巻！今動いたら確実に死ぬぞ！」

中嶋が訴える。

巻は唇を噛み締める。手が震えていた。

「わかった。ここは言う通りにする。」

巻は静かに呟く。

「巻二曹！こんなところにいたらホントにヤバイですよ！」

しきりに反抗する隊員、戦闘服の胸の名札には堂本という名が見て取れた。

「堂本…、貴様！」言うことを聞かない隊員に中嶋が怒鳴る。

「自分は死にたくありません。すみません！」

悠たちに反抗した隊員ら、約三名は走っていった。

「くそっ…。」

巻は悔しそうに呟きながら頭を抑えていた。

その間にも、野球選手と子供の雪合戦のような一方的な砲撃戦は続いた。

味方の砲撃も弱まる。

どれだけの間敵の攻撃は続いていたのだろうか…。

夕日が完全に海に消えた時。

敵の砲撃は止んだ。

敵の揚陸艦から無数の小型艇やLCACが飛び出してくる。

悠は砲撃が止まったことを確認し、頭を上げて海を見た。

「止んだ…。敵が来る！撤退だ。今しかない！」

悠は隊員らに言う。

皆頷き、ゆつくりと立ち上がった。その姿は泥にまみれ、目と赤い唇だけが見て取れる黒い顔になっていた。

しかし、隊員ら悠を含め6人は即座に自らの小銃を抱え走り出した。

悠に、巻二曹、中嶋二曹、赤西一士、草薙一士、玉置一士の6人。

穴と残骸だらけの牧草地を走り抜ける。

途中、転がる死体に躓き転びそうにもなるが、悠たちは牧草地の奥の森林地帯へと走った。

敵はどんどん岸に迫る。

すると、紫色の空を悠たちの走る方向とは反対、海岸に向けて戦闘ヘリが飛翔してゆく。

「殺っちまえ！」

巻が空に向かって叫ぶ。それに答えるかのように戦闘ヘリは唸りをあげて飛翔してゆく。

悠たちはやっとのことで比較的安全と思われる所まで走り抜いた。

さすがの隊員たちも息を切らした。

「ハア…ハア…とりあえず大丈夫か？」

巻と悠は顔を見合わせて頷いた。

ヘリの飛ぶ音に、微かに砲撃音が交じる。

しかし安心したのは束の間。

悠たちは撤退が遅れ、部隊から孤立していた。

何しろとにかくの撤退で集合先も知らされていない。

通信機も突然の攻撃に動転して準備していなかった。

「とりあえず…、統率も糞もねえ。完全にしてやられたな。」

中嶋は苦笑いする。

しかし赤西を始めとする一士の三人は冗談じゃないという顔をしていた。

6人は歩いて森林に入っていく。

その時、また間髪入れずに起こったこと。

タァン…

一発の銃弾が悠の頬を掠め、木に当たった。

敵？そんなバカな！

と誰もが思った。

今、上陸を試みているはずの敵が、しかも自らの行く手から発砲出来るわけがない。

そうなると答えはひとつ。

悠は体を屈めながら即座に叫んだ。

「打つな！味方だ！」

「Boys, be ambitious！」

中嶋が敵味方識別のために定められている英文を叫んだ。

すると、悠たちの前方に一人の隊員が姿を表した。

「…涼原！」

悠は思わず叫んだ。

その隊員は、見慣れた顔。あの涼原二曹であった。

鋭い目つきでこちらを睨みつける彼女に思わず悠もたじろいだ。

「不破二曹…。」

涼原は銃を下ろす。

悠の隣で他の隊員らは溜め息をついた。

「良かった味方で」

巻が言う。

「びつくりさせないで下さい。」

涼原が巻に向かって言う。

「ああ？こつちこそいきなり発砲されてビビったわ」
巻が言い返す。

まあまあと悠は割って入った。

「しかし涼原、お前多数相手にひとりで戦闘始めるのはいい判断ではないぞ。」

悠は厳しい顔で鈴原に言う。

すると…

「あの…これ…」

涼原は自らの後ろの木の根元を指差した。

そこには他にもう一人隊員が座りこんでいた。

「負傷者か！」

巻と中嶋が同時に叫ぶ。

「なるほど…」

涼原はこの負傷した隊員を守るべく発砲した。
悠は合点がいった。

悠と中嶋が駆け寄る。

隊員の階級は一尉。名前は真田。
左足に鉄片が突き刺さった後の傷跡があり、止血手当がされていた。

「うう…」

真田は呻き声をあげる。

気に持たれかかり呻く彼の姿は痛々しい。

悠は涼原の目をみる。涼原はまっすぐこちらを見ていた。

「仕方ない。敵が迫ってる。俺が背負っていこう。とにかく今は部隊に合流せねば…。」

悠は決心を決めて皆に言う。

「そうだ、部隊に合流して敵を迎え撃つ！」
巻は声を震わせる。

隊員らは頷く。

皆、顔は武者のように鋭い表情をたたえていた。

未だに砲撃音やヘリの飛翔する音が聞こえる。

「俺たちは自衛隊員だ！日本を守るのが仕事だ！生きて、奴らをギヤフンと言わしてやる」
中嶋が便乗する。

「アイツらに、日本の土を踏んだことを後悔させてやる。」

木々の狭間から見える敵揚陸艦にうめ尽くされた海。

やがて青く暗くなつていくその海を皆睨みつけていた。

「行きましょう！」

赤西が言う。

皆、足取りを確かに森の奥へと歩いていった。
復讐を誓いつつ。

彼らはただ部隊を目指した。

7月7日夜7時

敵の上陸部隊は、急襲作戦を成功させ苫前を始め、北海道の日本海に上陸を果たした。

長い長い1日が終わる。

この長い長い激動の1日が、後の長い戦いの始まりだった。

全ての日本人の運命を変えた1日。

為す術はなかった。

第6話 無力

夕日を背に纏い、迫り来る洋上の敵の上陸部隊。

地平線を埋め尽くす。

そして…、敵の護衛戦闘艦が次々に砲撃をしてくる。

凄まじい砲撃音。空からはヒュルルルと甲高い音が響き渡る。

「頭を下げる！爆風で首持ってかれるぞ！」

呆然と海を見つめていた悠の頭を中嶋が抑えつける。

砲弾は悠たちの手前、目と鼻の先に着弾する。

土が舞い上がり、またどこからか悲鳴が聞こえる。

雨あられのように降り注ぐ砲弾に味方は次々に倒れてゆく。

悠たちは何も出来ない。

敵の上陸部隊はどんどん迫る。

味方は必死に対艦ミサイルを打ち込むが、最初のミサイル攻撃で大半の火力を失った自衛隊の反撃は効果が薄い。

「退却！退却！」

誰かの叫ぶ声が聞こえる。

それを聞きつけた巻が叫ぶ。

「おい、撤退だ！逃げるぞ！」

「ダメだ！今動いたら危ない！」

中嶋がいさめる。

すでに泥だらけの顔は殺気に満ちている。

「だけど、ここで縮こまってたって、走って逃げたって砲撃に晒されるのは同じ……！」

巻が喋りかけてるときに再び近くで爆発する。

「敵の上陸が間近になれば必ず砲撃は止む。その時が撤退のチャンスだ。」

悠は周囲の隊員らに訴える。

「いやだ！俺は行く！」

隊員らは言う。

「やめとけ！死にたいのか！」

赤西が怒鳴り散らす。

「巻！今動いたら確実に死ぬぞ！」

中嶋が訴える。

巻は唇を噛み締める。手が震えていた。

「わかった。ここは言う通りにする。」

巻は静かに呟く。

「巻二曹！こんなとこにいたらホントにヤバイですよ！」

しきりに反抗する隊員、戦闘服の胸の名札には堂本という名が見て

取れた。

「堂本…、貴様！」言うことを聞かない隊員に中嶋が怒鳴る。

「自分は死にたくありません。すみません！」

悠たちに反抗した隊員ら、約三名は走っていった。

「くそっ…。」

巻は悔しそうに呟きながら頭を抑えていた。

その間にも、野球選手と子供の雪合戦のような一方的な砲撃戦は続いた。

味方の砲撃も弱まる。

どれだけの間敵の攻撃は続いていたのだろうか…。

夕日が完全に海に消えた時。

敵の砲撃は止んだ。

敵の揚陸艦から無数の小型艇やLCACが飛び出してくる。

悠は砲撃が止まったことを確認し、頭を上げて海を見た。

「止んだ…。敵が来る！撤退だ。今しかない！」

悠は隊員らに言う。

皆頷き、ゆっくりと立ち上がった。その姿は泥にまみれ、目と赤い唇だけが見て取れる黒い顔になっていた。

しかし、隊員ら悠を含め6人は即座に自らの小銃を抱え走り出した。

悠に、巻二曹、中嶋二曹、赤西一士、草薙一士、玉置一士の6人。

穴と残骸だらけの牧草地を走り抜ける。

途中、転がる死体に躓き転びそうにもなるが、悠たちは牧草地の奥の森林地帯へと走った。

敵はどんどん岸に迫る。

すると、紫色の空を悠たちの走る方向とは反対、海岸に向けて戦闘ヘリが飛翔してゆく。

「殺っちまえ！」

巻が空に向かって叫ぶ。それに答えるかのように戦闘ヘリは唸りをあげて飛翔してゆく。

悠たちはやつのことで比較的安全と思われる所まで走り抜いた。

さすがの隊員たちも息を切らした。

「ハア…ハア…とりあえず大丈夫か？」

巻と悠は顔を見合わせて頷いた。

ヘリの飛ぶ音に、微かに砲撃音が交じる。

しかし安心したのは束の間。

悠たちは撤退が遅れ、部隊から孤立していた。

何しろとにかくの撤退で集合先も知らされていない。

通信機も突然の攻撃に動転して準備していなかった。

「とりあえず…、統率も糞もねえ。完全にしてやられたな。」
中嶋は苦笑いする。

しかし赤西を始めとする一士の三人は冗談じゃないという顔をしていた。

6人は歩いて森林に入っていく。

その時、また間髪入れずに起こったこと。

タン…

一発の銃弾が悠の頬を掠め、木に当たった。

敵？そんなバカな！

と誰もが思った。

今、上陸を試みているはずの敵が、しかも自らの行く手から発砲出来るわけがない。

そうなると答えはひとつ。

悠は体を屈めながら即座に叫んだ。

「打つな！味方だ！」

「Boys, be ambitious！」

中嶋が敵味方識別のために定められている英文を叫んだ。

すると、悠たちの前方に一人の隊員が姿を表した。

「…涼原！」

悠は思わず叫んだ。

その隊員は、見慣れた顔。あの涼原二曹であつた。

鋭い目つきでこちらを睨みつける彼女に思わず悠もたじろいだ。

「不破二曹…。」

涼原は銃を下ろす。

悠の隣で他の隊員らは溜め息をついた。「良かった味方で」
巻が言う。

「びつくりさせないで下さい。」

涼原が巻に向かって言う。

「ああ？こつちこそいきなり発砲されてビビったわ」
巻が言い返す。

まあまあと悠は割って入った。

「しかし涼原、お前多数相手にひとりで戦闘始めるのはいい判断ではないぞ。」

悠は厳しい顔で鈴原に言う。

すると…

「あの…これ…」

涼原は自らの後ろの木の根元を指差した。

そこには他にもう一人隊員が座りこんでいた。

「負傷者か！」

巻と中嶋が同時に叫ぶ。

「なるほど…。」

涼原はこの負傷した隊員を守るべく発砲した。

悠は合点がいった。

悠と中嶋が駆け寄る。

隊員の階級は一尉。名前は真田。

左足に鉄片が突き刺さった後の傷跡があり、止血手当てがされていた。

「うう…。」

真田は呻き声をあげる。涼原は顔色ひとつ変えずに彼を見下ろしている。

「仕方がない。敵が迫ってる。俺が背負っていこう。とにかく今は部隊に合流せねば…。」

悠は真田の傷を見て皆に言う。

隊員らは頷く。

涼原の顔が少しだけ緩んだ。

未だに砲撃音やヘリの飛翔する音が聞こえる。

7月7日夜7時

敵の上陸部隊は、あつという間に苫前に上陸を果たした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844e/>

焰 -ホムラ-

2011年2月2日06時08分発行